

明代エチナ史素描

—古地図と文献史料によるアプローチの試み—

井上 充幸

(総合地球環境学研究所)

はじめに

エチナに住むトルグートの人々の間には、カラ=ホト(黒城)滅亡にまつわる伝説が語り伝えられているという。それはおおむね以下のような話である。

昔々のこと、カラ=ホトの最後の支配者カラ=バートル(黒英雄)は、その無敵の軍隊をたのんで、中国全土を征服すべく戦いを挑んだ。ところが雄図むなしく、敗北を重ねたカラ=バートルは、本拠地カラ=ホトに退却して籠城した。この時、攻めあぐんだ中国皇帝の包囲軍は、水の手を断ち切るために、カラ=ホトのすぐそばを流れる黒河の流れを西の方へ誘導し、もとの河床は堰堤を築いて堰き止めてしまった。その結果、暗渠を掘り抜いて黒河の水を引き込んでいた、カラ=ホト城内の井戸は涸れてしまった。カラ=バートルは城内の西北隅に新たな井戸を掘らせたが、80丈(およそ280m)に達しても水は1滴も出てこなかった。もはやこれまでと観念したカラ=バートルは、自らの財宝をその深い井戸に投げ込み、妻子を自らの手にかけて後、西北の城壁を破って最後の戦いを挑んだ。中国側の軍隊に占領されたカラ=ホトは、徹底的な掠奪の後に破壊され、誰も近づく者のない見捨てられた廃墟と化したという。

この伝説は、これまでもしばしば、チンギス=カン率いるモンゴル軍によるカラ=ホト攻略、あるいは馮勝の率いる明軍による元側勢力駆逐の史実と結びつけられ、様々な劇的要素を盛り込まれつつ語り伝えられてきた¹。注目すべきは、黒河の流れの変化とそれに伴

¹ コズロフ『蒙古と青海』(『西域探検紀行全集』11、白水社、1967年)4「エツィン・ゴルの下流とハラ・ホト」、『額濟納旗地名志』(額濟納旗地名委員会、1988年)第7章「民間伝説」所収「哈日巴特爾將軍的傳奇故事」、色音『居延故地—黒河流域的人文生態』(四川人民出版社、2003年)所収「黒城的伝説」ほかを参照。

う水の涸渇が、カラ=ホト滅亡の大きな要因となっている点である。

もちろんあくまで伝説であり、後世の人々による附会も数々あるとは思われるが、現在でも烏蘭格日勒 (Ulaan Gerel、エチナ旗の現中心地ダライクブ鎮南郊) の西南 25km ほどの所にある宝徳格波日格 (Bôödôg Booreg / 漢語で「大沙壩」の意) は、南北 1,000m あまりにわたって走る砂丘であり、これこそ馮勝が堰堤を築かせて、カラ=ホトに向かう黒河の流れを断ち切ったところであるという。また景愛氏らの調査によっても、黒河の流れを堰き止めた遺構が確かめられ、黒河の流れは人為的に改変されたとする伝説が裏付けられた、ともいわれている²。

そのことの当否はさておき、かつて黒河は、その下流において現在よりも東側に流れ下り、「居延沢」と呼ばれる巨大な1つの湖に注いでいたのだが、ある時期から黒河の流れる向きが西側になり、居延沢は消滅、新たにガション=ノール・ソゴ=ノールの2つの湖が出現し、現在に至っている、と言われている。もしそれが事実であるとするならば、歴史上、黒河の流れに変化が起きたのは、果たしていつ頃のことになるのだろうか？

筆者は、2003年11月・2004年8月の2回にわたって、古地図から見た居延沢の変遷について、主に中国で作成された古地図をもとに簡単な発表を行った³。また前号において、『中国歴史地図集』をもとに作成した「黒河流域歴史地図集」を掲載したが(『オアシス地域研究会報』第4巻第2号、2004年)、ここに表されたそれぞれの時代における居延沢の姿は、文献上の考証が困難な事情もあり、推測を交えて描かれた部分が多いと思われる。そのため今回は、主として明の時代に作成された絵地図を紹介しつつ、当時の人々が居延沢をどのように認識していたかについても、あわせて紹介していきたい。

現在筆者は、黒河の流れと湖の位置の変遷は、遅くとも14世紀から15世紀にかけて起こった可能性が高いと考える。以下、この時期以降のエチナをめぐる自然(とりわけ水)と人との関わりについて、ささやかな考察を試みたい。

第1章 古地図に見る黒河下流のルートと湖の位置との変遷

² 『額濟納旗地名志』第4章「自然地理実態」2「地片」、景愛「額濟納河下游環境変遷的考察」(『中国歴史地理論叢』1994年1号)

³ 「2003年度河西走廊・エチナ・銀川巡見報告」(第18回オアシス研究会、2003年10月)、“The transition of the Juyan-ze Lake viewed from the old maps” (The 4th International Symposium on the Tibetan Plateau, Aug. 2004)

第1節 居延沢の消滅と新たな2つの湖の出現

図版1は、清の順治14年(1657)に成立した『肅鎮志』(高弥高等纂修、全4巻)巻頭に載せられた絵地図である⁴。地図は、南を上、北を下にして、南北の距離をかなり圧縮して描いているが、図の下方には、西から流れてきた黒河が「亦集乃城」(エチナ城、すなわち現在のカラ=ホト遺跡の城郭)を中州のように囲んで東寄りに流れていき、「亦集乃海」(すなわち今日言うところの旧居延沢)に流れ込んでいる様が、明瞭に描かれている。途中、黒河の線が途切れているのは、頁の継ぎ目の部分に当たるためである⁵。

地図の成立年代については、その時期を精確に特定することは困難である。『肅鎮志』は、明代に成立していた古い地方志に、若干の改訂・増補を施して出版された書物であり、清の年号が附加されている記事を除いては、おおむね明代の情報をそのまま伝えているものと考えられる⁶。そして、よってこの地図も、明の時代から伝えられてきた可能性が高く、あるいはさらに元、もしくはそれ以前の状況を示した原図が、そのまま引き写されている可能性もある。

図版2は、奈良女子大学の相馬秀廣氏よりご提供頂いた、現在のカラ=ホト周辺を写した衛星写真に加工を施したものである。これによっても、西の方から流れてきた黒河の跡が2本に分岐して、カラ=ホト('KH'と示される四角形の地形)を中州のように取り囲んでいる

4 これとほぼ同じ図は、『重刊甘鎮志』(楊春茂纂修、全6巻図1巻)の巻頭にも収められている。『肅鎮志』と同じく清の順治14年(1657)に成立・刊行され、内容もほとんど同じものである。また、『肅鎮志』には順治14年(1657)刻本も存在するが、今回は、描線が最も明瞭な鈔本『肅鎮志』所載の絵地図を示した。

5 その南側に描かれた「兀魯乃(グルナイ)湖」は、現在もエチナ旗の南100kmほどの所、巴丹吉林砂漠の北に位置する「古日乃(Gürnai)湖」を示す。このあたりには、現在も紅湖(Ulaan Nûûr)をはじめ、大小数多くの淡水湖が分布しており、湖には葦が密生しているという(『額濟納旗志』第1編「地理」第2節「地貌」3「沼沢・泉水」、『額濟納旗地名志』第1章「古日乃蘇木概況」・第4章「自然地理実態」7「湖」)。絵地図の表現も、そのことを示しており、18世紀の記録にも重要地点としてこう記されている。

兀魯乃湖は、鎮夷(現在の民勤県)の北、甘州(現在の張掖市)の西北にある。湖水は浅く透明で、夏には涸れてしまう。湖岸をぐるりと囲むのはすべて胡楊の木であるが、そこから少し離れるとたちまち黄砂の中に尽きてしまう。湖の水が涸れて、砂が浮き上がってきたのであろうか?湖の南岸には丈の短い草が多く生えており、遊牧民は常にここに集結してから、その後分かれて中国国境の各地に掠奪に赴く(『秦辺紀略』巻4「肅州近疆」)。

その横の空白の丸印は、『重刊甘鎮志』によれば「大泉」と記されるが、現在のどこに当たるかは不明。

6 たとえば明の万暦年間(1573-1620)には、李応魁が纂修した『肅鎮華夷志』が出版され、現在その一部が残存しているが、清の初頭にまとめられた『肅鎮志』・『重刊甘鎮志』(タイトルに「重刊」と示されているように)には、それらの内容が引き継がれている。

様子が見て取れる。この2本の河のあとは、北東の方向で再び合流して旧居延沢の跡に続く。

図版1と図版2とを見比べると、両者が一致することは明らかで、ある時期まで黒河はこちらの方に流れて、その先に位置していたはずの居延沢に注ぎ込んでいたことがわかる。そして図版1は、図版2のある時点での状況を簡略ながら正確に写し取った、今のところ現存する唯一の地図、ということになる。このことは、20世紀初頭のコズロフによる現地聞き取り調査に基づく証言とも一致する⁷。

図版3は、京都大学文学研究科所蔵の、ダンヴィルの『中国新地図帳』より「大沙漠西部とハミ周辺」の部分拡大図である⁸。この地図は、フランス人の宣教師が、1707年から1717年にかけて中国全土の測量を行い、そのデータに基づいて作成された。地図を見ると、「エチナ河」(黒河 / Etchine Pira)の終着点には、西に”Soukouc Omo” (Souhouc Nor / Soho Omoとも表記、現在のガシオン=ノール)、東に”Sopou ou Sobou Omo” (Sopou Nor / Sopo Omoとも表記、現在のソゴ=ノール)が出現しているのがわかる⁹。一方、”Koutoulé Pira” (タルタリア総図では Kouendoulen と表記。当時、エチナのことを指す呼称)と記された河がそのすぐ下から分岐しているが、当時ここに黒河に向かって流入する流れがあったことを示すものであろう(次に挙げる齊召南は、そのように述べている)。あるいは、さきの図版1と図版2にあらわれたかつての黒河の流れを示し、その先にあったはずの居延沢がすでに消滅してしまっていることが示されている、という可能性も考えられる。

同じデータに基づき、中国で作成された地図としては、康熙年間刊の『皇輿全覽図』や乾隆年間刊の『内府輿図』(別名『乾隆十三排図』)など、数種類の版本が現存する。その中から、2003年に景印本が出版され比較的参照の容易な、乾隆25年(1759)刊『大清一統輿図』所収の「平索營・哈密和屯」(八排西二)に描かれたエチナ附近を見てみると¹⁰、やはりさきのダンヴィルの地図と同じく、西に「朔都克淖爾」(”Soukhouc Nor”の音写)、東に「朔博淖爾」(”Sopou Nor”)があり、「狼心山」で合流した「額集内必拉」(”Etchine(i) Pira”)が、「坤都必

7 コズロフ『蒙古と青海』4「エツィン・ゴルの下流とハラ・ホト」

8 L'Extrême Occidentale du grand Desert de Sable et le pays aux environs de Hami. From d'Anville, *Nouvel atlas de la Chine*, Henri Scheurleer, 1737.

9 エチナ附近の様子は、同書所収のタルタリア総図 (Carte Generale de la Tartarie Chinoise) およびその部分図 (occupé par une partie du Cobi ou Cha-mo desert sabloneux, jusques à la Ville de Hami) にも著される。pira および omo は、満洲語でそれぞれ河・湖を表す言葉の音写。

10 『大清一統輿図』(全国図書館文献縮微復制中心、2003年)。『中国边疆史志集成』(天龍長城文化芸術公司編)の1冊として刊行され、乾隆25年(1759)銅版印行本を復刻したもの。

拉」(“Koutou(lé) Pira”)と書かれた箇所です。再び分岐して2つの湖に流入している。右手には「古爾乃鄂謨」(“Gúrнай omo”)も存在する。

乾隆年間の人、斉紹南は『水道提綱』を著し、その中で黒河下流と2つの湖についてこう書いている。

エチナ河が西北に流れると、そこに崑都倫水という河があり、東北から流れてきてエチナ河に注ぎ込んでいる。さらに北に流れると2つの巨大な湖となり、西北にあるものを索廓克鄂模(池の周囲は90里)といい、東北にあるものを索博鄂模(池の周囲は60里あまり)という。これがすなわち、いにしへの居延海なのである(経緯度は、西経17度附近、北緯42度5分)(斉召南『水道提綱』巻5「黄河」附録諸水)。

ここでは、測量に伴い判明した湖の経緯度・周囲の長さが記される点が注目される。ちなみに経度は、北京を本初子午線として記されている。現在のグリニッジを標準とした経度によれば、北京は東経116度附近に、ガション=ノールとソゴ=ノールは東経101度の線を挟んで東西に位置しているので、おおむね正しい数値が示されていることとなる。また、緯度についても、現在2つの湖は、北緯42度20分の線を挟んで南北に位置しており、こちらもおおむね問題はない。湖の周囲の長さをそれぞれ現在の単位に換算すると、ガション=ノールは約51.84km、ソゴ=ノールは約34.56kmとなる。当時の湖の規模を具体的に記した、数少ないデータである。

つまり、18世紀の初頭には居延沢は消滅、西北に2つの湖が出現し、すでに現在の状況に近い姿へと変わっていた、ということは、どうやら確実に言えそうである¹¹。

第2節 黒河と湖の水量の減少について

そして、もう一点重要なことは、すでに元の末期から明の初期の時代にかけて、居延沢(当時の呼称でエチナ海)の水量が大幅に減少していたらしいことである。歴史史料には、このようなことが記されている。

¹¹ ただし、「ソコ(ホ)ク」(意味不詳、*sojor* / 病んでいる(?))と呼ばれていた湖が、いつから「ガション」(*gaxûûn* / 塩を含んで苦い)と名前を変えたのか、この点については未だ明らかにしていない。ご教示を請う次第である。ちなみに、「ソゴ」とはモンゴル語(*Sûb*)で「かわうそ」を意味し、この湖に彼らが棲んでいたことから、トルグートの人々が名付けたという(『額済納旗地名志』第4章「自然地理実態」7「湖」)。

カラ=ホトの東¹²に位置する居延沢は、俗に「三海子」と呼ばれる3つの小さな湖、すなわち哈班 Haban・哈巴兒 Habar・哈刺失 Halashi に分かれており、多くの流れがそこに集まって注ぎ込んでいるが、それらはいずれも「中原の一小湖にも匹敵しない」ほど小さな湖であった（『肅鎮志』巻1「山川」張掖河、および、梁份『秦辺紀略』巻3「甘州北辺近疆」居延沢）。

では、このような状況になったのがいつなのか？それを探るための手がかりは、別の地図に示されている。

図版4は、長崎県島原市の本光寺に所蔵される『混一疆理歴代国都之図』の部分拡大図である。西暦1402年に成立した原図をもとに、1470年代以降に作成されたこの世界地図は「本光寺図」と呼ばれる¹³。

これによると、「亦集乃」、すなわちエチナの横に「冬班腦児」と記されている。別の写本では、この文字は「各班腦児」と記されており、「冬」は「各」の誤写であると思われる

¹² 史料によっては、湖の方位を「城の東北」（『元史』巻60「地理」3）としたり、「城の東南20里」（『秦辺紀略』巻3「甘州北辺近疆」居延沢）としたりするが、おおむねカラ=ホトよりも東よりに位置していたと考えて差し支えなさそうである。ただし、古文献の方位に関する記述については、慎重を期する必要がある（小長谷有紀「中国内蒙古自治区アラシャン盟エチナ旗における自然資源の利用」（『オアシス地域研究会報』第4巻第1号）を参照）。

¹³ この「本光寺図」と同系統のものは、龍谷大学附属図書館所蔵の『混一疆理歴代国都之図』、熊本市の本妙寺所蔵の『大明国地図』、天理大学図書館所蔵の『大明国図』（以上の地図については、藤井謙治・杉山正明・金田章裕編『絵図・地図からみた世界像』（京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」中間報告書、2004年）巻頭の図版・解説を参照）、北京の中国第一歴史档案馆所蔵の『大明混一図』（『中国古代地図集・明代』（文物出版社、1994年）の図版1ならびに図版説明を参照）が、それぞれ現存している。

きわめて画期的な世界地図であるこの本光寺図は、すでに本プロジェクトにおいても幾度か紹介されている。カラ=ホト周辺のデータに関しては、おそらく元の時点での情報がそのまま記載されると考えられるが、ここに記された地名の多くは未だ未解読のままである。「亦集乃」の上に広がる巨大なスペースは、湖水であろうか、それとも砂漠であろうか？写本によっては、ここを湖水と同じ青色を施すものもあれば、砂漠と同じ灰色の彩色をおこなったものもある。

この地図には、歴史地図と現勢地図の両方の要素が盛り込まれており、この謎のスペースも、その形状が、「居延沢、在其縣故城東北。『尚書』所謂流沙者也。形如月生五日也。弱水入流沙、流沙、沙與水流行也」（『水経注』）という古典の記述をふまえて描かれたように見え、「城東北有大沢、西北俱接沙磧」（『元史』巻60「地理」3）という記述に準じて描かれているようにも見える。

今後、この地図からは、もっと多くのことを「解読」していく必要があるだろう。詳しくは、杉山正明「アフロ・ユーラシア・サイズの歴史像」（『世界史を変貌させたモンゴル—時代史のデッサン—』角川叢書13、2000年）を参照されたい。

が、こちらを取って解説してみると、この「各班 guban」とは「3」を意味するモンゴル語 gûrban、「脳児 naor」は「湖」を意味するモンゴル語 nûûr、それぞれの音写であり、「各班脳児」とはすなわち「3つの湖」を意味する。よって漢語で「三海子」といっているのは、このモンゴル語を意識した呼称であろう、ということになる（なお、この読みについては、国立民俗学博物館の小長谷有紀・一橋大学のシンジルト両氏にご教示頂いた）。

3つの湖それぞれの名前については、モンゴル語、あるいは西夏語である可能性が考えられるが、目下その意味する所は不明である。この3つの湖が、現在のガシヨン=ノール・ソゴ=ノール・旧居延沢（現在の天鷲湖）に相当する、という可能性もあるが、その点についてもこれ以上は分からない。

以上の諸点をまとめると、遅くとも14世紀から15世紀にかけて、黒河と居延沢の水量が大幅に減少するという現象が起こっていたことはおそらく確かであり、これに伴って、黒河の流れがその向きを東から西よりに変えた可能性は高いと思われる。しかしながら、これが人為的に行われたのかどうかについては、後にも述べるように、現在文献上からは確認できない。現地での考古学的調査や衛星写真の解析など、他分野の研究成果を期待したい。また、湖底堆積物の解析から、ガシヨン=ノール・ソゴ=ノールに水が流入しはじめた年代が明らかになりつつあり、さらなる調査結果の報告が待たれる¹⁴。

第3節 カラ=ホト出土文書の物語る元末の水不足

『黒城出土文書』所収の文書によれば、元の時代のエチナ周辺では、旱魃に伴う農作物の損失と、それに対する対処に関する報告と考えられるもの（F111:W64）、せっかく芽吹いたばかりの作物が、虫害に遭ってしまったことを伝えるもの（F116:W553）、塩分が多い土地・砂漠・ゴビなど土壌が劣悪なため、規定により作付けすべき樹木が植えられないことを訴えるもの（F257:W6）、などなど、過酷な気候風土に苦しんでいた様子がうかがえる¹⁵。

またこのほかにも、この時代の別の文書からは、カラ=ホトでの生活は経済的に苦しいので、転勤を願い出る地方官がいたことを伝えるものがあり¹⁶、元末の政争に敗れた大物のト

¹⁴ 遠藤邦彦・相馬秀廣「黒河下流部の湖岸地形と湖沼堆積物—2003年調査報告—」（第18回オアシス研究会、2003年10月）

¹⁵ 詳しくは、古松崇志「元代カラホト文書解説（1）」（『オアシス地域研究会報』第1巻第1号、2001年）、および李逸友『黒城出土文書（漢文文書巻）』（李逸友編著、科学出版社、1991年）上編3「亦集乃路的農牧業和商業」を見よ。

¹⁶ 2004年7月7日の水曜会の席上にて、佐藤貴保氏より紹介されたもの。

クト（脱脱）が至正 14 年（1350）に左遷された土地が、ほかならぬこのエチナ路であったことなど（『元史』巻 138「脱脱伝」）、当時のエチナは、決して自ら進んで行ってみたいような、暮らし向きのよい土地とはとても言えないような状態であったことがうかがえる。

むろん、エチナの地が軍事的に極めて重要な地点であったことは、元の時代とて変わることはなく、至元 22-23 年（1285-6）に、甘州（現在の張掖）の「新附軍」200 名を、人口が減少していたエチナに移住して屯田させ、近隣住民との協力のもと「合即渠」という水路を開削し、91 頃 50 畝（およそ 518.12ha）の田畑を開拓したことが史書に記されている（『元史』巻 14・60・100）。ちなみに、当時のエチナ地域の総人口は不明だが、李逸友氏はおよそ 7,000 人ほどであったと推定している。『黒城出土文書』のデータからは、元の時代のエチナでは数多くの水路が開削され、農耕地が広がっていたことが判明している¹⁷。また、近年の現地調査や衛星写真解析などによっても、カラ=ホトの西に位置する緑城遺跡周辺で、西夏から元代にかけての農耕地の跡が、相当広い面積にわたって広がっていることが明らかにされつつある。当時のエチナにおいては、かなりの規模で農業開発が進展していたものと考えられる。

しかしこれはつまり、時の政府の強力な主導のもと、積極的に軍隊や移民を送り込んで、政策的に屯田開発と耕作地の維持とを支え続けていかなない限り、農耕民が定住していくことが困難な土地であった、ということもできよう。14 世紀頃から、エチナの水不足は深刻だったのかもしれない。そしてこのことは、おそらく続く明の時代においても同様だった可能性は高いと思われる。

第 2 章 明代前期のエチナをめぐる情勢

エチナについての歴史記述の多くは、西夏と元の治下における繁栄の時代が終わり、清の時代、西方に逃れていたトルグートの人々が帰還してエチナに居を定めるまでの、およそ 300 年以上もの間、この地は中国のコントロールを離れ、漠北の遊牧勢力が支配することとなった、とする。このことはおおむねの所まで事実ではある。実際、明朝側の史料には、エチナに関して断片的な記述しか残されておらず、当時の具体的な様相に関しては、残念ながらよく分からない点が多い。

¹⁷ 吳宏岐「『黒城出土文書』中所見元代亦集路的灌溉渠道其相關問題」（周偉洲主編『西北民族論叢』第 1 輯、中国社会科学出版社、2002 年）に詳しく述べられている。

しかしこれまでは、明代の初めに明の大軍がエチナを攻略した結果、廃墟となったカラ=ホトは放棄され、あたかもこの地は無人の荒野になったかのごとくに理解されている。おそらくこれは、当時西征軍を率いて河西回廊一帯を制圧した馮勝が、嘉峪関を築いて明朝の版図を防衛する長城の西端と位置づけ、ここより外部の土地を放棄したとする、歴代史料に基づく理解である。また、最初に紹介したカラ=ホト滅亡の伝説も、かかる印象を与える要因となっているようだ。ところが、明代の史料を拾い集めてみると、一概にそうとは言いきれない事実が、おぼろげながら浮かび上がってくる。以下、明代におけるエチナの歴史を概観しつつ、史料をもとにいくつかの点を取り上げて論じていこう。

第1節 洪武年間の記事から 一対決の時代一

明の太祖、洪武帝の時代には、中国北辺の各地において、北方に退いた元の勢力と明の軍勢との間で熾烈な戦闘が繰り返された。モンゴル高原のすぐ南に位置するエチナも、両者の勢力圏がぶつかり合う地点であったため、ここでも都合3回の大規模な戦闘が繰り返された。

【第1回目の戦役：馮勝らの遠征】

明の軍団による最初のエチナ攻略は、洪武5年(1372)に行われた。同年6月(旧暦、以下の月も同様)3日(戊寅)の記事によれば、洪武帝の命を受けた征西將軍の馮勝らは、蘭州から河西回廊方面に大群を率いて出撃、右副將軍の傅友徳の部隊を先鋒とし、武威・永昌など回廊沿いの主要なオアシス都市を次々と陥落させ、エチナ路に進軍した。ここでの戦闘に関しては、わずかにこのような記述しかなくない。

エチナ路の元の守将、ブヤン=テムル(ト顔帖木兒)は、全城をあげて降伏した。

この後、明軍はさらに進撃を続け、「別篤山口」(史料によっては「別駕山口」とも記す、不詳)なる所で元の岐王のドルジバル(朶兒只班)を敗走させた。傅友徳らはさらに安西・敦煌にまで攻め入り、多くの捕虜・莫大な戦利品と共に帰還した¹⁸(『明太祖実録』巻74)。

この事件を伝える他の史料も、おおむねこのような簡略な記述で尽きており、このとき

¹⁸ 谷応泰『明史紀事本末』巻10「故元遺兵」によれば、馮勝らが帰還したのは洪武7年(1374)3月のこと

の戦闘の様子は具体的にはまるで分からない。しかし、書き方からして、取り立てて書き記すこともないほど明側の一方的な勝利に終わり、ブヤン=テムルらも相手の陣容を見て、抵抗らしい抵抗もせず、あっさりと全面降伏して城を明け渡す道を選んだのではなかろうか。

先に挙げた伝説や、景愛氏が述べるように、果たしてこの時の戦闘で、水の手を断ち切るための堰堤が建設されたのかについては、記述が存在しない以上不明とせざるを得ない。またこのとき、城内とその周辺に居住していた人々は、よその土地に移動させられたと述べられることが多いが、これについても実は明確な記事は存在しない。よってこれも不明とせざるを得ない。

【第2回目の戦役：沐英らの遠征】

洪武13年(1380)には、再びエチナの地で、明と元の軍勢が対決した。同年3月21日(壬子)の記事によれば、青海方面の平定に武功を立てた西平侯の沐英は、軍勢を率いて寧夏の靈州(現在の銀川の対岸、靈武県附近)に到達した。この時、偵察に赴いた騎馬部隊は、モンゴル高原にて元の勢力を率いる国公のトガチ(脱火赤)・枢密知院の愛足らが、彼らの拠点の和林(カラコルム)から南下してエチナに至り、兵力を集結させていることを探知した。そこで、

沐英はついに軍勢を率いて黄河を渡り、寧夏を經由して賀蘭山を越え、流沙を横断することおよそ7昼夜にして、エチナの境界に到達した。そこはトガチらが天幕を張って野営している場所から50里(約28km)の地点であった。沐英はここで軍勢を4隊に分けて、夜になってから音を立てぬよう馬にハミを噛ませ、4方向から接近して野営地を包囲した。トガチ・愛足らは生け捕りとなり、その全軍を捕虜にして帰還した(『明太祖実録』巻130)。

これは、おそらく明初のエチナ攻略作戦に関する記事の中で、最も具体的な状況が描かれたものである。ここで注目すべき点は、トガチらが率いる元側の軍勢が、この時はカラ=ホトの城郭に拠らず、おそらくは水辺の駐屯地に天幕を張って野営していたことである。おそらく彼らは、はじめから城郭の防御力などあてにするつもりはなく、平原での騎馬戦によって明側の軍勢を迎え撃とうとしていたのであろう。そのため、当然のことながら水攻めもやっていない。

【第3回目の戦役：宋晟らの遠征】

3度目の対決は、洪武17年(1384)のこと。同年5月29日(丙寅)の記事によれば、涼州衛の指揮使の宋晟らに、軍勢を率いて「西番の叛酋」を討伐するよう命令が下った。

宋晟の率いる軍勢は、エチナ路に至り、再びこの地に拠っていた元の海道千戸のイエスン=テムル(也先帖木兒)・国公の呉伯都刺赤(呉バートル?)・平章の阿来(アリー?)らと、その部下およそ18,700人を捕虜とした。宋晟は、その中から、壮士980人あまりを選抜して麾下に組み入れ、その他の者はことごとく解き放った(『明太祖実録』巻162)。

戦果については詳しいものの、戦闘については全く触れるところがなく、詳細は不明である。この記事は、史料によっては洪武6年(1373)のこととするものもあり、あるいはこちらが正しいかも知れない¹⁹。

【その後のカラ=ホトの様子】

この3度の戦役で、明側はエチナから元の勢力を押し戻すことに、一応は成功する。以後しばらくの間、この地で大規模な戦闘は起こらず、エチナ周辺一帯は明の勢力下に入ったものの、後にも触れるように、この時点で明の軍隊はこの地に恒常的に駐屯していない模様で、カラ=ホトの城郭そのものも、どうやら放棄されたようだ。

梁份は、廃墟となって後のカラ=ホト城内の様子について、次のような証言を残してくれている²⁰。

カラ=ホトの城郭は廃墟と化したのが、宮殿は今に至るまでなお高くそびえ立ち、旧時のものとはいえその広大な規模を偲ばせる。

¹⁹ 『明史紀事本末』巻10「故元遺兵」、『秦辺紀略』巻3「甘州北辺近疆」居延城ほか。たとえば謝樹森・謝広恩等編『鎮番遺事歴鑿』(香港天馬圖書有限公司、2000年)巻1、洪武6年の條に、この年の10月、涼州衛(現在の武威)が元の勢力の攻撃を受けるが、守備隊が奮戦して撃退、追撃した彼らはエチナでの作戦にも合流して武功を立てたという。

²⁰ 梁份の『秦辺紀略』(別名『西陲今略』)は、清の康熙30年頃(1691)に成立した、中国西北方面に関する地誌である。著者の梁份は、いわゆる明の遺民で、呉三桂の反乱に加わった後、陝西・甘粛に赴き、康熙21年から27年(1682-8)にかけて、自らの足で辺境の各地を実見して回り、また当地に残存していた史料を博搜、それらをもとに『秦辺紀略』を編纂・執筆したという。彼の詳しい経歴については、内藤虎次郎(湖南)「梁質人年譜」・湯中「梁質人年譜」を見よ。『秦辺紀略』の記述は簡略ながら、現在では失われた史料からの摘録も多く、エチナについても、明以前の情報と思われる有用な情報を載せる。各種の写本・版本が伝わり、1987年には青海人民出版社から校点本も刊行されている。

また、同じ記事の注釈には、歴史考証に続けてこうも述べる。

思うに、中国の西北地方には通常杉の木は無いのだが、カラ=ホトの宮殿の梁や棟にはみは杉材が使われており、これがどこからもたらされたのかは不明である。黄色や青色の瑠璃瓦、鹿毛の石畳と壁が施される。梁の間には「至正元年（1341）重修」の6文字が記され、その他の文字は摩滅して解読不能であった（以上、『秦辺紀略』巻3「甘州北辺近疆」居延城）。

同内容の記事は、乾隆年間編纂の『重修肅州新志』（乾隆2年（1737）黄文焯纂修、乾隆27年補刊本）肅州2冊「古蹟」にも収められている。

肅軍の探哨がエチナに至り、カラ=ホトの城郭を見たことがあった。宮殿には廟があり、その大堂の屋根は青色や緑色の瑠璃瓦で葺かれ、壁土は鹿毛で粉飾されていた。梁は沙木（杉の木の類）で作られ、ひと抱えの長さが7尺ほど（およそ2.2m）もある。梁の上には「至正元年」の文字が記され、ここが元の時代の古城であり、明の時代には人が住んでいなかったことが分かる。

つまり、いつのことかは不明ながら、肅州から派遣された偵察隊がエチナに赴き、実地で見聞して持ち帰った情報として記される。後にも触れるように、明代の中期までは、中央政府の命によって、甘州・涼州・肅州・寧夏などの各地から、時折偵察部隊がエチナに派遣されている。また、清の時代に入ってから、順治13年（1656）と康熙元年（1662）の2度、エチナに守備兵が置かれ（いずれもすぐに廃止）、康熙35年（1696）には肅州の緑營兵200名が派遣された。現存する地方志などに断片的に記された、かつてのエチナに関する記事の中には、彼らの持ち帰った情報をもとに書かれたものも多くあったに違いない。20世紀に入って、カラ=ホトが「再発見」される以前にあっては、当地の状況を伝える貴重な報告といえよう。

いずれにせよカラ=ホトは、あくまで放棄されただけであって、明初の攻城戦（これがもしあったとしての話）に際する破壊も最小限に留まり、火の手がかけられるような大規模な破壊はおそくなされていなかった、と言えるであろう。

以上が、洪武年間におけるエチナをめぐる状況である。

第2節 永楽年間の記事から 一敵対から間接統治へ一

永楽年間に入ると、中国側は対外政策を大きく転換させる。永楽帝は東方の女真に積極的に働きかけ、彼らの多くを帰属させて衛所に組み込んだ。一方、西方のハミ王家に対しても同様に招撫策を実施、ハミ王を忠順王に冊封するとともに、当地にハミ衛を置いて前線基地とした。こうして中国側は、かかる間接統治を通じて、モンゴル高原になお強力な勢力を保ち続ける元の側に対し、東と西から包囲する体勢を構築した²¹。永楽4年(1406)の、さきに登場した宋晟によるエチナの処置についての建議も、こうした明朝政府による対外政策方針の文脈において理解されるべきものである。

【宋晟の建議：エチナとハミとの関係について】

この年の閏7月10日(丁卯)の記事によれば、甘肅総兵官を務め、数々の武勲によって西寧侯に封じられていた宋晟は、次の4点にわたる提案を行った(番号は便宜上附したもの)。

- ① エチナの旧城(すなわちカラ=ホト)は規模が小さく手狭なので、兵卒を徴発して城郭の拡張工事を行う。
- ② そこに商人たちを集めてきて、塩や粟を商税として納入させ、それによって辺境防衛に必要な物資を備蓄する。
- ③ 軍隊に屯田させて、農器具を与えて開墾と耕作を行わせる。
- ④ 忠順王の部下を頭目官に任命して管轄させる。

まず①に関しては、どれほどの規模にまで拡張しようとしていたかは不明である。元の時代、エチナ路は、所轄の戸数が10万戸以下の「下路」にランクづけられ(『元史』巻60「地理」3)、行政府のあったカラ=ホトの城郭の規模も、それに見合った規模で建設されたと考えられる。あるいは、かつての「上路」にランクされていた甘州路なみの、10万戸規模の戸口移住を企図し、それに見合った規模を整えようと考えたのかも知れない。

②に関しては、古来エチナは、甘肅の張掖・酒泉とモンゴルのカラコルムを結ぶ南北の道と、新疆のハミと寧夏の銀川・山西の大同を結ぶ東西の道が交差する、交通の要衝であった。人と物の往来は活発で、それに伴い交易活動も盛んであった。そしてそれは、元の

²¹ 檀上寛『永楽帝—中華「世界システム」への夢—』(講談社選書メチエ 119、1997年)第8章「クビライを越えて」を参照。

時代のカラ=ホトもまた同様であった。『黒城出土文書』の中には、様々な業種の店舗が城内に存在したことを示す文書や帳簿の類、家畜市場の存在を伝える契約文書、さらには遠隔地からやってきたムスリム商人に対する営業許可の認可状から、茶葉の包み紙に至るまで、当時の商業の活況を示す文献が多数収められている（『黒城出土文書』上編3「亦集乃路の農牧業和商業」）。官側が商人を活用して必要物資の調達に当たらせる、という宋晟の案も、基本的には元の時代に採られていた政策と、基本的には同じ発想に立っているものと思われる。なお、エチナの近辺には、良質の塩を産出する「白塩池」があり（『肅鎮志』巻1「山川」）、宋晟はこれを元手に商売をさせようと目論んでいたとも考えられる。

③についても、さきに第1章第3節で見たように、これまた元の時代の政策（もとより漢の時代以来、この地に入植を試みた政権のもとではずっと同じ政策がとられたのであるが）とまったく同じである。ここでもその人数や、開墾する土地の規模については、具体的にはわからない。しかし、①の城壁拡張と考え合わせると、かなりまとまった数の人員を（おそらくは数千人単位の規模で）投入しようと考えていたようである。

④も、実は極めて重要なポイントである。

忠順王とは、先にも述べたように、明朝から冊封を受けたハミ王家の王号である。ハミ王家の直接の起源は、チャガタイ家の血を引くチュベイが、元の時代、13世紀の後半に河西の地へ移ってきたところから始まる。彼は、オゴデイ家の実力者、カイドゥと敵対して中央アジアを追われ、一門を率いて元のクビライに帰順、河西の地に安堵された後、彼ら一門は、代々元の最西端の守りとして数々の武勲を建てた。やがて一門の当主は最高ランクの王号である幽王を受封し、河西一帯に隠然たる勢力を確立、「チュベイ=ウルス」とも称すべき実質を備えるまでに至った。

エチナの地もチュベイ家の勢力範囲のただ中であつたため、彼らとの繋がり深く、『黒城出土文書』に収録された文書の中には、チュベイ一門の人々の名が登場するものや、彼らの軍団に対する軍糧の支給に関する事柄をはじめ、重要な情報の数々が盛り込まれた「大徳4年軍糧文卷」（F116:W553/W565/W552 W390）などが存在する。

明の時代に入り、洪武20年代（14世紀末）にハミを根拠地として河西西半に強盛を振るったのが、初代ハミ王家のクナシリ（兀納失里）であつた。チュベイ家の傍流出身であつた彼は、さきの洪武5年における馮勝らによる河西回廊掃討戦によって、肅州などから後退してきたと思われる本家筋の残党を吸収し、一門の盟主となったとされる。クナシリは、洪武24年（1391）、明朝に遣使して、延安・綏徳・平涼・寧夏の各地で馬の貿易を要求した（『明太祖実録』巻207、2月1日（戊午朔）條）。これに対して明朝の側は、彼が西域からの朝貢

使節団の通行を妨害したことを口実として、宋晟らを派遣してハミを陥落させた（『明太祖実録』巻211、8月21日（乙亥）條）。オルドスにまで達するクナシリの勢力圏の広さと、それに対する明側の危機感がうかがえる。

この洪武年間における対決姿勢からは一転、永楽年間に入ると招撫策を採ったことは先にも述べたとおりである。永楽2年（1404）、朝貢してきたハミ王家のエンケ=テムル（安克帖木兒、クナシリの弟）を忠順王に冊封し（『明太宗実録』巻32、6月25日（甲午）條）、永楽4年（1406）にはハミ衛を設置（『明太宗実録』巻52、3月27日（丁巳）條）。この頃すでにエンケ=テムルは死去し、かわって永楽帝の手許で養育されていたクナシリの子、トクト（脱脱）が跡目を継いでいた。彼は実質上、明側の手によって送り込まれた傀儡であり、ハミ王家内部ではこれ以後内紛が頻発するのだが、永楽帝は彼を全面的にサポートし続ける。明によるハミの間接統治の基盤はこの時点で作り上げられたと見てよい。

天山山脈の最東端に位置するハミ（哈密・哈梅里 / Khamil(M) / Qamil>Qomul(T)）の地は、北のバルクルを経由して東はモンゴル高原へ、西はイリへと繋がり、東南の砂漠を渡れば、河西のオアシス都市を経て中国本土へと結ばれる、東西交通・貿易の要衝であった。明朝はハミの地を押さえると、西域諸国の朝貢使節に対して、中国へ出入国する際には必ずハミを経由すること、彼らが入貢する際には、ハミの通訳を介して中国側とのやりとりをおこなうこと、などを定めた。つまりハミは、西域諸国との接点に位置する出入国管理センターのごとき役割を担ったのである。同時に明の側は、ハミからの報告を通じて入手した情報に基づき、西域諸国のあらゆる情勢を把握しようと務めた。

永楽以後、モンゴル高原を本拠とするタタール（韃靼）・ジュンガリアに拠ったオイラート（瓦剌）・トゥルファン盆地に勢力を伸張してきたモグーリスターン、これら遊牧諸勢力と明との関係は、その中心に位置するハミを1つの焦点として展開していくこととなる。明にとってハミを掌握することは、まさしく「西域の喉元を押さえる」ことだったのである。そしておよそ80年近くの間、明と西域諸国との間には、ある程度安定した国際秩序が保たれることとなった（許進『平番始末』巻上）²²。

そして、話を④に戻すと、宋晟によるこの建言は、まさしくこのハミ衛設置直後のタイ

²² 以上、元から明初にかけてのチュベイ一門については、杉山正明「幽王チュベイとその系譜」・「ふたつのチャガタイ家—チュベイ王家の興亡」（『モンゴル帝国と大元ウルス』東洋史研究叢刊65、京都大学学術出版会、2004年）に詳しい。また、明初のハミ王家については、松村潤「明代哈密王家の起源」（『東洋学報』第39巻4号、1957年）・永元（小田）寿典「明初の哈密王家について—成祖のコムル経営—」（『東洋史研究』第22巻第1号）を参照。

ミングを見計らって行われたものにほかならない。宋晟は、ハミ王家にとって元以来ゆかりの深いエチナの地をもあわせて彼らに管轄させ、農業開発・商業流通の振興策をセットにして提示することで、西北への防備をより強固なものにしようと企図したのである。これは実質的に「エチナ衛」の設立とも呼びうるプランであり、同時に元の時代の状況を再現し、エチナを拠点として確保し続けるための再開発計画なのであった。

ところが、宋晟のこの提案に対する永楽帝の回答は、以下のようなものであった。

- ① エチナは砂漠のまっただ中にある。城壁工事をしようとするれば、必ずや数万人を動員せねばならないであろう。
- ② そしてまた、商人に粟と塩を納入させようにも、あまりに距離が遠すぎるではないか。

つまり、エチナの地理的条件を理由に、いずれも実現不可能と判断された。ただし一方で、③と④に関しては宋晟の提案通り採用される運びとなり、永楽帝は以下のように、それぞれの担当官庁に命を下した。

- ③ 工部に対して、エチナの屯田軍に農具を供給することを命ず。
- ④ 兵部に対して、忠順王の頭目官を適宜任命することを命ず。

つまり、エチナは僻遠の地であるため、明朝政府が直接介入して、大規模な人力と資金を投下することはせず、あくまで現地のハミ王家に一任する形で、エチナを管轄させてしまおう、ということに決定したのである（以上、『明太宗実録』巻57）。

それでは、この後この政策がどう実施され、展開していったかが気になるところだが、残念ながら史料にはなにも記されていない。よって、ほんとうに実行に移されたのかどうか、実はよく分からない。

【タタールの衰退とオイラートの興隆：永楽年間の漠北情勢】

この頃、タタール内部では権力闘争が激化し、永楽3年（1405）にはティムール朝の保護下にあったチンギスの末裔、オルジェイ=テムル（中国史料では本雅失里）が名目上の君主に迎えられていた。しかし、西方から勢力を拡大してきたオイラートの圧迫を受けて、永楽7年（1409）には、タタール側はモンゴル高原東部に後退（『明史』巻327「外国」8「韃靼」）、同じく押し出される形で南のエチナにも移り住んできた。

こうした北辺の動向を受けて、永楽7年(1409)正月8日(辛亥)の記事では、宋晟亡き後、西北方面防衛の大任を引き継いだ甘肅総兵官左都督の何福は、永昌に官営の牧場を設置して軍馬を養い戦備を整える一方²³、配下の都指揮の劉広らに命じて、長城線を越えてエチナ方面にパトロールに行くよう建議し、許可を得ている。さらに同月の15日(戊午)の記事においては、涼州(現在の武威)都督僉事の吳允誠らに、騎馬の偵察部隊を率いて、さきの劉広ら(彼らは今の張掖から出動)と共にエチナに向かい、当地の牧民たちの実情を探るよう命が下る(『明太宗実録』巻87)。

そして、同年秋7月17日(丁亥)の記事によれば、タタールのトクトブカ(脱脱ト花)をはじめとする多くの頭目たちが、部民を率いてエチナの地にやってきたことが何福から報

²³ この時期、軍馬を調達するために、河西のあちこちに大規模な官営の牧場が設置された。また古来、西域諸国にとって、最も重要な貿易品目の1つは、やはり馬であり、中国側は茶などの物産をその対価として与えた。中国の辺境沿いの諸都市では、各地で対外貿易のマーケットが開かれ、にぎわいを見せた(互市)。

余談になるが、『鎮番遺事歴鑿』巻1には、永楽11年(1413)に「養駝令」が出されたことを記す。これは、人丁5人ごとに1頭の割り当てでラクダを飼い、3年後に2倍に繁殖させることを原則とする法令であった。最初に2頭を飼う場合には労役免除・租税半減、5頭からスタートすればいずれも全額免除、1人で1頭以上ラクダを飼う者には報奨を与える、などの特典付きで奨励された。これにより、鎮番営(現在の民勤県)では、飼育されるラクダの数がおびただしく増加し、数年の内に10万頭にもなったという。ところがこれ以後、うち続く自然災害(春先の異常低温や秋の旱魃)とそれに伴う飢饉の発生のために、ラクダの飼育が困難となり、永楽19年(1421)、ついに養駝令は撤廃された。なお巻2の嘉靖18年(1539)の條には、「駝戸」が収めるべき税額(ラクダ1頭あたり年6銭)と、未納者に対する罰則が記される。

鎮番営は、涼州(現在の武威)から流れ下る石羊河が、砂漠のただ中に流れ出たその先に位置し、西は甘州・東は寧夏に通じ、遊牧勢力の集結地でもある石羊河の終着点の白亭海(瀦野沢)を控えた、最前線の防衛拠点であった。この地域での戦闘・荷役には、多くラクダが使用され、馬と並んで重要な家畜であり、秋の重陽の節句(9月9日)にはラクダのレースが行われたという(景泰2年(1451)の條)。また、侵攻してくる側もラクダを使用しており、巻1の洪武16年(1383)にはタタールの人々が、宣徳10年(1435)にはオイラートの300人からなる部隊が、それぞれラクダを駆って青土湖(鎮番営の北東およそ110kmに位置)の塩を略奪している。ここは当地の重要な産業である塩の生産拠点で、牧草も豊富であった。

『鎮番遺事歴鑿』は、洪武元年(1368)より中華民国25年(1936)までの、およそ560年以上にわたる当地の歴史書であり、地方志としては珍しく編年体が採られている。記述は簡略だが、今では失われた地元の風土記・名族の家譜・文人の随筆などの記事が摘録されており、一読、巻を擱く能わざる面白さに満ちている。鎮番営の置かれた地理的環境・気候風土は、エチナのそれとよく似ており、今後、明清両代を通じて一種の「定点観測」が可能な『鎮番遺事歴鑿』の記述を通じて、当地における自然と人との関わりを子細に解明していくことは、エチナにおける過去の事象を理解する上で、大いに益するところがあると思われる。『鎮番遺事歴鑿』は、2000年に香港天馬図書有限公司から校点本が出版されている。

告される。これを受けて永楽帝は勅命を下し、辺境情勢の安定のためにエチナにやってきた人々を受け入れ、明への帰順を誓わせた上でエチナに住まわせ、あるいは長城の防衛に当たらせるよう、腹心の楊栄を派遣して何福と協議させた(『明太宗実録』巻94)。さらに同年11月2日(庚午)の記事では、何福(この頃、寧遠侯の肩書きを与えられる)がエチナの地に赴き、軍を駐屯させて事態の処理に当たっている(『明太宗実録』巻98)。結局この時には、両勢力の間で大規模な戦闘は起きなかったようであり、明側が優位のまま事態が推移していったようである。

【エチナ周辺の交通路：シルクロード交通の要衝をめぐって】

このような最中、永楽7年(1409)6月25日(丙寅)、オイラートの使節のノムタシュ(暖答失)らに対して上諭が下った。彼らは永楽6年(1408)冬に、当時のオイラート諸部の中でも最大の実力者、マフムード(馬哈木)から派遣されて中国にやってきていた(『明史』巻328「外国」9「瓦剌」)。永楽7年(1409)3月には、永楽帝は北京に第1次巡幸を行っており(『明史』巻6「本紀」6「成祖」2)、オイラートの使節団も、それに伴って北京に滞在中であったと思われる。

タタールのオルジェイ=テムル(本雅失里)とアルタイ(阿魯台)らは、オイラートのマフムード(馬哈木)らによって打ち負かされた。おまえたちの帰りのルートはエチナを経由することとし、ハミを経由してはならない。もしエチナの通行に不都合が生じた場合は、ただちに他のルートを選んで帰還するように(『明太宗実録』巻93)。

つまり、使節団一行の帰還に際して、通例であればハミを経由して出国すべきところを、北辺情勢との関係から、あえて迂回して別ルートを探るように、明側がわざわざ指定してきたのである。

当時のタタールとオイラートの関係については、先に述べたとおりであり、タタール側の実権は、グイルチ(鬼力赤)を倒したアルタイに移っていた(『明史』巻327「外国」8「韃靼」)。またハミも、当主のトクトと関係が悪化していたとおぼしいエンケ=テムルの妻子が、かつてタタールのグイルチのもとに身を寄せ、ハミでの主導権を取り返すべく策動する様子を見せるなど、この頃のハミとタタールとの関係は、かなり密接であったようだ(『明史』巻329「西域」1「哈密衛」)。そうした事情から、政治的配慮によるルート変更がなされたのであろう。

彼らが実際にたどったルートの詳細は不明だが、おそらく蘭州から河西回廊を西北に進

み黒河沿いに北進する、あるいは寧夏（現在の銀川）から賀蘭山を越えて砂漠を西に突っ切る、このいずれかのルートでエチナに到達し、そこから西のハミへは向かわず、北のモンゴル高原西部を経由してジュンガリア方面に抜ける、というコースが想定されていたと思われる。

エチナを中心に東西南北に走る十字路には、すでに西夏時代から道路沿いに駅伝が設けられていたらしく、12世紀初頭の西夏の領域を描いたとされる『西夏地形図』には、カラ=ホトに置かれていた「黒水鎮燕軍」から首都の「興慶府」に向かって伸びる幹線沿いに、いくつもの地名が記されている²⁴。

続く元の時代には、広大な領土の隅々にまで「站赤」（ジャムチ）と呼ばれる駅伝網が整備され、もちろんエチナにおいても同様であった。『永楽大典』巻1941所引『経世大典』によれば、エチナ路管轄の駅（ステーション）は、カラ=ホト城内の駅以外に、城の北側に広がるゴビ灘を突っ切ってカラコルムへ走る道路沿いに2箇所、南の甘州路との境界まで南に走る道路沿いに5箇所の、合計7箇所があったという。『黒城出土文書』所収の「至正廿四年整点站赤文卷」の中には、それらの名称をすべて記したものがある（F2:W65）²⁵。

エチナを東西に貫く道は、明以降は「北大路」と呼ばれていた。梁份はこのように記す。

北大路は肅州（現在の酒泉）のはるか北、広漠たる砂の平原のただ中にある。元の時代には、さまざまな民族が燕京（すなわち元の大都、現在の北京）に赴く際に、この道を通っていた。道路沿いには水・草ともに充分ある（『秦辺紀略』巻4「肅州近疆」北大路）。

元の時代、このルートは、西は天山北麓からハミを通ってエチナに至り、そこから寧夏の境界をなす賀蘭山に達していた。ここからは、オルドスの北側を通って陰山山脈沿いに山西北部に向かうルートや、黄河を越えてオルドスを横断し西安方面に向かうルートなどが接続していた²⁶。そしてこの北大路は、さきに洪武13年（1380）、沐英が軍勢を率いてた

²⁴ 『西夏地形図』は謎の多い地図であり、現存する最古のものは、宋の范仲淹の文集『范文正公文集』の、明の万暦37年（1609）重校版に附録として掲載されたものである。それまでこの地図がどのようにして伝えられてきたのか、なぜ明のこの時期になって突然出現したのか、それらのいきさつは現在の所全く不明である。詳しくは、陳炳忠「『西夏地形図』初探」（『西夏文物研究』、寧夏人民出版社、1985年）を参照。なお、図版は『中国古代地図集・戦国-元』（文物出版社、1990年）図版102を見よ。

²⁵ 『黒城出土文書』上編5「亦集乃路的站赤」を参照。

²⁶ 杉山正明『クビライの挑戦—モンゴル海上帝国への道—』（朝日選書525、1995年）第3部に所収の図版、「初期クビライ政権の主要王家と首都圏」を参照されたい。

どった道でもあり、後に記すように、明代中期以降は、エチナを根拠地とする漠北の諸勢力が、長城線の各地を攻撃する際に利用する主要幹線道路ともなった。ちなみに、現在の銀川-エチナ公路も、これと同じルートをたどる。

さらに、カラコルムと酒泉・張掖方面を結ぶ南北の道も、站赤が整備されると共に、ルート沿いの防衛線も整備された可能性がある。梁份は別の箇所におおむねこう記す。

遮魯（虜）障とは、肅州の鎮夷（現在の金塔県鼎新鎮）の北にあり、いにしへの長城である。築かれたのは、漢の時代とも元の時代とも言われているが、いずれも定かではない。いずれにせよ、ここは代々甘州・肅州の急所となる重要なルートであった。

確かに『史記』などには、漢の武帝の時代に、強弩都御の路博徳が、居延沢のほとりに遮虜障を築いたことが記される（『史記』匈奴列伝）。近年の考古学的発掘により、この地域からは漢代の長城や砦などの遺構・漢簡などの遺物が多数発掘され、歴史書の記述が裏付けられたことは、周知の通りである。そのことを述べつつ、一方で梁份はこのような注釈を附している。

一説には、元の時代、居延沢はエチナ路に属し、当時ここには人々が住み、村落・旅籠・駅伝もあり、山丹に通じる道を往来していた。そのため遮虜障を築いて西からの侵入路を断ち、行き交う人々が掠奪されぬよう備えたという。遮虜障は、居延沢のほとりを起点に、狼心山を經由して西に曲がり、まっすぐハミの北山（バルクル）に向かって延びていた。現在も烽火台の遺構が残っている（以上、『秦辺紀略』巻4「肅州近疆」遮魯障）。

2003年の夏に、筆者はこの地域を訪ね、漢の時代に築かれたとされるエチナ周辺の城塞跡を視察した。この時、殄北候官（A1）の城の内外には、漢の時代（B.C.1C-A.D.2C）のものとともに、西夏から元（13-14C）にかけてのものと見られる陶磁器片が、混在して散乱していた（京都橘女子大学の弓場紀知氏のご教示による）。また、すぐ近くの湖岸跡の段丘上にある、鉄の鑄造をおこなった鍛冶場の跡で、鏃と鉄砲の弾丸を発見した。鏃は、銀川の西夏博物館で、同一の形状の物が展示されていた（西夏時代のものとされる）。鉄砲玉（もしこれがそうだとすれば）も、少なくとも漢代のものではありえない。漢代の城塞が、後の時代に補修されて、継続利用されていた様子がうかがえる証拠は、ほかにもあちこちに存在した。梁份の記述にも、なにか基づくところがあったのかも知れない。

話を再び永楽時代に戻すと、この頃の明朝は、優勢な軍事力を背景に招撫策を実施、積極的な外交戦略を展開して、安定した国際秩序を打ち立てることに、一応は成功した。明朝は、エチナの管理をハミ王家や甘肅の軍事・行政機関に委任しつつ、西北方面からの侵入などの非常事態に際しては直接軍事介入を行い、硬軟両面の策を使い分けて、直接・間接に支配力を及ぼし続けた。

実際の状況が具体的にどうであったか、という史料を根本的に欠いている以上、あまり結論めいたことは言えないのだが、エチナの治安と交通路の確保に関して、永楽時代の明は、様々な手段を介してイニシアチブを握り続けた（少なくともその努力は怠らなかった）のであり、その意味で、この地を「棄地」として切り離す考えはまだなかった、とは言えるであろう。

第3章 明代中期以降のエチナをめぐる情勢

宣徳年間(1426-1435)に入ると、永楽年間までの積極的な対外政策は大幅に軌道修正され、内政の充実に力が注がれていくようになる。またこのおよそ10年間、西北国境の情勢も、多少の小競り合いを除いてはおおむね平和裡に進展し、幾分の落ち着きを見せた。

この間のエチナに関しては、宣徳5年(1430)正月9日(庚戌)の記事によれば、麥克零部(Mecrit/メルキト部)の人々がエチナに移り住み、このままでは先々国境紛争の火種になる、との報告が入る。これに対する宣徳帝の上諭は、彼らのもとに使者を派遣して招撫し、もし明朝に帰属する意志があれば、ただちに官職と褒美を与えて適当な場所に住ませよ、というものであった(『明宣宗実録』巻61)。

ところが、次の正統年間に入る頃から、情勢はにわかに急転する。15世紀中盤は、西北の遊牧勢力に対する明の統制力が決定的に弱まった時期であり、その過程で、エチナに対する影響力も決定的に喪失していくこととなる。以下、順を追って見ていこう。

第1節 15世紀中盤の記事から

【タタールの没落：エチナへの最後の軍事介入】

オイラートの攻勢を受けて追いつめられていたタタールのアルタイ(阿魯台)は、宣徳末年頃(1434-5)、ついにオイラートのマハムード(馬哈木)の子トゴン(脱斡)によって倒され

た。タタール側の残存勢力は各地に逃亡、アルタイの後継として立てられた王子の阿台とその部下のドルジ=ベグ（朵児只伯）は、エチナの地に逃れてきた（『明史』巻327「外国」8「韃靼」）。

『鎮番遺事歴鑿』巻1によれば、宣徳9年（1434）の夏に、オイラートの軍勢が柳林湖の北岸に陣営を構えた。ここは、鎮番營の北東およそ70kmに位置し、明初には元の王保保が幕営地を置き、清の雍正年間から屯田開発が推進された所である。おそらくオイラートは、逃亡したタタールの残党を追ってここまで侵入していたのであろう（あるいは明側の誤認か?）。7月には守備の李忠らのもとに涼州・永昌から援軍500名が派遣され、青土湖の附近でオイラート軍と会戦、明側は軍勢を3隊に分けて攻めかかり撃滅したという。

北京に最初の知らせが入ったのは、宣徳10年（1435）のことで（この年1月、宣徳帝は死去）、同年3月8日（庚辰）の記事によれば、政府は急遽、陝西方面の戦備を整えるよう指示を出すと共に（『明英宗実録』巻3）、正統元年（1436）2月21日（丁巳）の記事では、明に帰順してきたタタールの人々から、彼らがエチナとその南東にある亦不刺山（鎮番營の北東およそ160kmに位置）の附近にかけて潜伏している、との情報を入手している（『明英宗実録』巻14）。恨み重なる仇敵のタタールを、徹底的に叩く好機と見た明朝側は、同年8月15日（戊寅）の記事において、オイラートのトゴンに対して共同戦線を採用することを申し入れ（『明英宗実録』巻21）、冬10月1日（癸亥朔）の記事では、辺境の諸将に対し、ドルジ=ベグたちの動静にさらなる注意を喚起するよう指令（『明英宗実録』巻23）、着々と包囲網を固めた。

『鎮番遺事歴鑿』巻1では、この時期、毎年のように鎮番營周辺で戦闘が繰り返されたことを記す。宣徳10年（1435）5月に、再びオイラートが鎮番周辺の人や家畜を掠奪、秋には再び青土湖に塩を掠奪に来た彼らを、李忠と千戸の呉英らが撃退、またこの時、別の所では、千戸の王剛・王雄らが阿魯台（あるいはタタールの阿台を指す?）とも戦っている。正統年間に入ってから、まず元年（1436）4月には、魚海の「番寇」巴総歹らが、指揮僉事の彭鉉らに生け捕りとなり、2年（1437）夏には、やはり「番寇」阿吉台・鉄木耳穆らを、百戸の李洪が塩池（鎮番營の西北130km附近の青塩池・白塩池を指す?）にて撃破、3年（1438）には、百戸の張名が手勢を率いてオイラートを大敗させている²⁷。

²⁷ これは余談だが、この一連の戦闘の後日談として、『鎮番遺事歴鑿』巻1には、鎮番營の諸将に対する「番寇」たちの復讐譚が記されている。

鎮番營の城内の東北隅には、聖容寺（洪武9年（1376）、指揮の陳勝が3,200金を費やして創建）という立派な佛教寺院があった。正統6年（1441）の2月のある日、4人の「番僧」（おそらくチベット僧）らが参拝に訪れ、鎮撫司の李洪が出迎えた。翌日、彼らが盛大に読経と梵唄を行うと、物好きな野次馬が見物につめかけ、阿弥陀仏と拝む者まで出る始末。その日の午後、李洪が千戸の黄義漢・百戸の張名らを連れて4人の僧侶を訪問、見物客も帰

翌年の正統2年(1437)3月25日(乙卯)の記事では、右都督の蔣貴らから、阿台とドルジ=ベグラが寧夏の西、賀蘭山の山陰に潜伏中、との情報が入り、早速寧夏から夜不収(探哨の意)が幾度も差し向けられた。夜不収は阿台の部下を生け捕り、彼らがすでに賀蘭山を去り、再びエチナに集結しようとしていることをつきとめた。これを受けて正統帝は、今こそ天が阿台らを滅ぼそうとしているチャンスと勇み立ち、部将たちに殲滅作戦の発動を命じ(『明英宗実録』巻28)、同年6月8日(丙寅)の記事においても、未だしかるべき手を打てない部将たちを叱咤激励して督促する、という逸りようであった(『明英宗実録』巻31。この時、正統帝はまだ11歳、実際には守り役の宦官、王振らの意向であろう)。

そして翌年、正統3年(1438)夏4月2日(乙卯)の記事によれば、行在兵部尚書の王驥・総兵官の任礼らは、ついに陣容を整えて出陣、ドルジ=ベグラを石城(居延城の北)にて撃破した。タタールの敗残兵力は、グルナイ(兀魯乃)にいた阿台のもとに逃れたが、こちらには蔣貴が軽騎兵2,500名を率い、肅州方面の鎮夷所から3昼夜かけて到達、指揮の毛哈刺を先頭に、諸将が麾下の手勢を率いて急襲し殲滅した²⁸。任礼と蔣貴の部隊は、ここで合流して翌日はエチナに向かい、さらに黒泉(高台所の西30kmほどに位置する黒泉堡か)から沙漠の彼方に至るまでタタール勢を掃討、多数の捕虜と戦利品を獲得して凱旋した(『明英宗実録』

っていき、彼らは互いに談笑に及んだ。

その時、城の南門から出火したとの急報が入り、李洪があわてて席を立った瞬間、4人の僧侶は素早く彼を取り囲むと、てんでに短刀を突きつけてこう言い放った。「逃げるな、李洪め！貴様は俺たちの兄弟の鉄木耳穆を殺した、だから貴様の命で償ってもらおう。こうなった以上、絶対に逃しはせんぞ！」言い終わった瞬間、4つの短刀が李洪の体を貫いた。彼らの正体は、4年前に李洪に撃退された阿吉台の部下たちだったのである。李洪は即死、黄義漢は素手で戦ったが苦戦、張名は足の病気で動きが取れなかったが必死で立ち向かった。やがて黄義漢は壁を打ち破って逃走、張名は刺殺されてしまった。

脱出した黄義漢は、走りつつ大声で助けを求め、この時たまたま城内を巡視していた守備の彭鉉がこれを見つけ、直ちに軍隊で寺を包囲した。その時、聖容寺の住持の玉山老愚が現れこう告げた。「賊はとっくに逃げましたぞ。」彭鉉は直ちに兵を2手に分け、それぞれ寺内の搜索と城内外の追跡に当たさせたが、夜になっても「賊はどこにも見あたりません」と復命するだけであった。彭鉉は、聖容寺の僧侶と賊とが内通しているのではないかと疑い、玉山老愚の制止を無視して彼らを逮捕・尋問したが(この間、数字欠落)、ついに賊を取り逃がしてしまった。

この事件の後、彭鉉は治安維持の責任を問われ罰せられたが、これまでに立てた戦功に免じて、守備から営指揮に転じ、百戸に降格させられたに留まった。この事件の顛末は、俞鉄肩の「大明正統辛酉鎮番營鎮撫司李洪公遇難紀略」に詳しい。

²⁸ 鎮夷所(現在の金塔県鼎新鎮)は、黒河が砂漠へと流れ出る箇所位置し、グルナイやエチナから川沿いに侵入するルートの守りとして、明の永楽年間(1402-24)に設置された。後に城壁が黒河に浸食されたため、天順年間(1457-64)に現在地に移った(『秦辺紀略』巻4「肅州北辺」鎮夷堡)。また梁份は、この時蔣貴が、鎮番營の北東に位置する魚海(白亭海の北東に並んで位置する湖)まで進出し、ここで阿台らの動静を探知してからこれを追撃した、と記す(『秦辺紀略』巻2「涼州北辺近疆」魚海)。

卷 41)。このとき、阿台とドルジ=ベグはかろうじて明軍の追撃を逃れたが、ついにはオイラートの手にかかり、あえない最期を遂げる（『明史』卷327「外国」8「韃靼」）。

結局、相手の弱り目に追い打ちをかけたとはいえ、華々しい戦果を挙げたこの一連の軍事活動を幕引きとして、エチナにおける明の直接介入は終わりを告げた。たしかに、オイラートとの連年にわたる対立・抗争に伴うタタール勢力の弱体化は、明にとっての宿願でもあった。ところが、いざそれが実現してみると、今度はこれまで利用してきたつものオイラート側が、もはや明側には手に負えぬほど強大化してしまったのである。そして、漠北におけるパワーバランスの変化のうねりは、やがて重大な結果を伴って明側をも巻き込むこととなる。

【オイラートの大攻勢：土木の変前後の情勢】

明の正統 4 年（1439）、オイラートではトゴン（脱歓）が死去し、その子のエセン（也先）がその後を継いだ。彼は、チンギスの末裔のトクトブカ（脱脱不花）を名目上の君主に立て、自らは「太師」と称して実権を握った。以後、中国西北の諸勢力は、次々と彼の麾下に入り、正統 8 年（1443）11 月 16 日（丁卯）の勅諭には、その有様が次のように述べられる。

近く聞くところでは、オイラートのエセンがしばしば出兵して、ハミや赤斤蒙古衛・沙州衛（敦煌）などの地を攻撃しているという。既に辺境の諸将に防備を厳重に固めるよう命じたが、甘肅からは、エチナにおいても賊の掠奪部隊が出没しているとの知らせが入った。任礼らに、防備を固め、危急の際には陝西に急報して対策を講じるよう、また他の所にあっても、決して油断を怠らないよう命ずる（『明英宗実録』卷 110）。

6 年前の勝利も束の間、エチナを含む西北全域が、オイラートに押さえられてしまったことがうかがえる。エセンは東方にもさらに勢力を拡大して、モンゴル東部の兀良哈三衛をも破り、果ては朝鮮までをも脅かすに至った（『明史』卷 328「外国」9「瓦剌」）。正統 9 年（1444）冬 10 月 29 日（甲戌）の上諭では、兀良哈が既にオイラートに屈服して内通し、沙州・罕東・赤斤の蒙古三衛にも、エセンの使者がやってきて平章などの官位を授け、明を離れてオイラートに帰属させようと策動していることが述べられる。同時に、大同・寧夏・謫力山（不詳）・エチナの広い範囲にわたって、オイラートが大侵攻を計画中、との知らせを受け、都指揮の季鐸を蒙古三衛に派遣する傍ら、密かに彼らの動静を探るよう命じている（『明英宗実録』卷 122）。

正統 11 年（1446）以降、辺境での馬市の開設や糧食供給の要求、朝貢を名目として派遣

する使節団の人数の大幅超過と下賜品の増額（当時オイラート側は、通例 1 回の遣使につき 50 人の所、2,000-3,000 人にも及ぶ人数を派遣）などの問題をめぐって、エセンと明の朝廷との軋轢はいよいよ激化していく。そして、正統 14 年（1449）7 月、遂にエセンは諸勢力を糾合して、遼東・宣府・甘州にかけての北辺全域にわたって大攻勢をかけ、自らは大同に押し寄せた。迎え撃つ明側は、宦官の王振にそそのかされた正統帝が、周囲の反対を押し切って親征を決意、大軍を率いて大同まで進軍したものの情勢を見て引き返し、土木堡で追撃されついに全軍が潰滅、正統帝は囚われの身になってしまうという、前代未聞の恥をさらす結果に終わった。

この史上有名な「土木の変」以後、エセンは正統帝を利用して明をコントロールしようと目論むが、明側は後を継いだ景泰帝と、于謙ら徹底抗戦派の側近たちとの頑張りによって、何とかこの難局を乗り切ることに成功する。一方、全モンゴルの統一を果たしたエセンは、ついにトクトブカを殺害して、自ら大カアン（瓦剌可汗、正式には「大元田盛大可汗」）を僭称し、独自の年号を立てるなど、元の再興を図った。しかし当時、チンギスの血を引かぬ者が大カアンを名乗ることは、モンゴルの伝統に反する行為であった。この動きは有力諸部の反発を招き、明の景泰 5 年（1454）の夏に、エセンは野望半ばにしてアラク（阿剌）たちの手にかかる。エセン亡き後、諸勢力同士が互いに主導権をめぐって争った結果、オイラート麾下の諸勢力は分裂してしまう（以上、『明史』巻 328「外国」9「瓦剌」）。この事態は、明にとって全く幸運であった。

【対外消極策への転換：土木の変の後遺症】

以後も、北方の混乱を背景に、勢力争いに敗れた人々が中国北辺に迫ってくる、という事態に変わりはない。しかしその対応は、以前と比べてずいぶんと様変わりしてしまった。景泰 6 年（1455）2 月 22 日（戊戌）には、甘肅の諸将に対し、このような上諭が下されている。

おまえたちの上奏によれば、北方の遊牧勢力は、去年の 9 月以来、互いに殺し合うようになり、それを逃れた者たちがエチナ地方に隠れ住むようになった。そこでおまえたちは軍備を整えて、今年 2 月に国境を越えて、これらの者を追撃して討ち取ったという。このこと自体は、おまえたちの職分に関わることであり、必要な任務である。しかしこの時、おまえたちが既に国境線を越えて出動していたために、朕は敢えておまえたちの行動を制止しなかったのだぞ。国境防衛はあくまで慎重さを貴び、事をなすに当たっては万全を図る、これこそが朕の願うところなのだ。今ここに、おまえた

ちに告げる。任務にあつてはあくまで専守防衛に努め、もし賊の動きに実際に辺境を侵犯するおそれがなければ、軽挙妄動して要らざるやっかい事を引き起こすべきではない。また、目先の利益にとらわれて、将来への慮りをおろそかにすることは、決して許さぬ（『明英宗実録』巻250、附録『明代宗実録』第68）。

とにかく自分たちのほうから余計な手出しだけはせぬよう、景泰帝が繰り返し命じている点が印象的である。最前線の諸将の思惑はいざ知らず、ここには、土木の変で自信を打ち砕かれ、ひたすら事なかれ主義に徹する明の朝廷の姿勢がにじみ出ており、いささか気の毒なほどである。

さらにそのずっと後、弘治8年（1495）6月、野也克力（Wild Mecrit、すなわち明に帰属していないメルキトの別部の意？）の頭目、亦刺思王たちのもとから、川哥兒なる人物ら34名が交渉のため肅州に派遣される、という事件があった。

彼らは本来、ウイグル系のムスリム、ベグ=アルスラーン（乱加思蘭）およびイスマーイー（亦思馬因）の遺民ともいわれ、成化年間（1465-87）の頃には、ハミの北山（バルクル）附近に拠点を置き、時折ハミや赤斤に侵攻した。ところが彼らは、かねてから「外辺の大達子」より、帰順して肅州を侵攻するよう圧力をかけられていた。この頃、ハミ西方のトゥルファンは、スルターンのアリー（阿力）のもと勢力を拡大し、弱体化していたハミに幾度も侵攻して王と王族らを拉致、牙蘭の率いる占領軍を駐屯させて支配体制を固めつつあった。一方の明の側もこの事態を放置できず、蒙古三衛の軍勢と、トゥルファンの支配を逃れてそこに避難してきていたハミの人々を糾合して、幾度かにわたって軍隊を派遣するなど、ハミの回復に躍起となった。しかし、馬文升らの努力で一時的にハミを奪還することには成功しても、確保しきれずすぐにトゥルファン側に奪い返される、ということを繰り返し、事態はトゥルファン優位のまま推移していた。野也克力の頭目たちを圧迫した「外辺の大達子」とは、状況から見ておそらく彼らであろう。

そのため、弘治年間にかけてのある時期より、野也克力はハミを離れてエチナ地方に移り住み、ここから黒河沿いに南下して、山丹・甘州・高台・鎮夷などの地方に略奪に赴くこともあった。ところがここでも依然として「外辺の大達子」の圧力はやまず、明の側からも撃退されて進退に窮し、頭目たちは明に帰順する道を選び、ハミなどの事例に準じて朝貢を許可するよう申し入れにやってきたのである。

そして甘肅の辺將たちは、野也克力の要求を容れて、エチナへの居住と明に対する朝貢を許可し、彼らにしかるべき官職を与えて明の戦力に組み込むべし、ハミへの軍事的支援とトゥルファンの東方拡大に対する抑止力として利用するためにも、この機会を逃すべき

ではない、もしも拒絶すれば、新たな敵を作ることになるだけだ、と上奏する。実際に彼らは、野也克力からの使者たちに、この知らせを持ち帰るよう指示しており、現場では一応の決着はついていたのである（以上、『平番始末』上、『明史』巻329「西域」1「哈密衛」）。つまりこれも、永楽年間と同じく、エチナ衛の設置を企図しての建言なのであった。

ところが、兵部の覆奏は、「エチナへの居住と互市は許可してもよいが、入貢と軍事利用については許可すべきではない」というものであり、これを受けた弘治帝と廷臣たちの協議結果は、以下のようなものであった。

そもそも北虜どもと、これまで明に帰順してきたハミなどを、同日に語ることはできない。もし野也克力に肅州からの入貢を許せば、北京までの長い道のりを往復する間、ろくでもない騒ぎを起こすことは目に見えている。千里の堤も蟻の穴から、というではないか。それに使節が北京に到着してからも、待遇が悪ければ恨みを抱かせ、厚くもてなせば欲を抱かせることになろう。朝貢の要望については厳しくこれを却下する（『明孝宗実録』巻101）。

ここにも、使節の入貢に対する、明側の過剰なまでの警戒心・猜疑心が見て取れる。この問題が、かつてオイラートのエセンとの間でも起こり、大侵攻の口実の1つとなったことは先に述べたが、土木の変に対する恐怖の記憶は、この頃になっても未だに明朝廷のトラウマとして強く残っていたのであろう。

かくして、外交面での自信を喪失した明朝は、専守防衛の道を選択し、それは長城線の徹底強化による領土囲い込み体制の完成、という形を取って現れることとなる²⁹。

【エチナに関する明代最後の記事：エチナに暮らした漢人について】

²⁹ ちなみに、楊子器によって中国全土の地図が、天文図とセットで作成されたのは、ちょうどこのすぐ後になる。この地図（『楊子器図』と呼称）は、現在も数種類の写本や木版印刷されたものが伝えられているが、その描かれた領域を、さきの『混一疆理歴代国都之図』と比較すると、楊子器図はこれを踏まえつつも、明らかにその範囲を縮小して描いており、中国西北地域より以西の地域に対する関心の後退、それに伴う正確な情報の欠如、などがうかがわれる。いわば、宋の時代に作成された『華夷図』（現存する一連の石刻地図を総称）のレベルへの後退であり、このことは、ここまでに述べたような、明の外交姿勢の変化とも対応する現象である、と言えるかもしれない。楊子器図については、Inoue, Mitsuyuki, “The Development of the Map of Yang Ziqi in East Asia”（『絵図・地図からみた世界像』所収）を参照。また、宋代の石刻地図については、『中国古代地図集・戦国-元』所収の一連の図版・解説を参照。

『鎮番遺事歴鑿』巻2、正徳8年(1513)の條には、このように記されている。

この年、エチナ(額済納依)に居た漢民が暴動を起こし、鎮番營出身の孫玉成が、1,000人近い人々を引き連れ、国境を越えて帰還してきた。鎮番の人々は彼らを受け入れた。

これまで史料の上では、漠北勢力の来住と明の軍事行動のことばかりが記されていたが、これは、明代のエチナに居住していた漢人について記した唯一のものである。孫玉成なる人物についてはもちろんのこと、帰還してきた1,000人あまりが、具体的にどのような人々であったのか、詳しいことは分からない。彼らは、永楽4年(1406)年の宋晟の発案に基づき、農器具を支給されて、開墾と耕作に勤しんでいた人々の生き残りかもしれないし、あるいはそれ以後、中国国境から拉致されてここに住まわされていた人たち、あるいは前線から逃亡してエチナまでたどり着いた人たちなのかもしれない。

『鎮番遺事歴鑿』には、南方に侵入してきた遊牧集団によって、鎮番營周辺の人々が拉致されたり、うち続く飢饉のために逃亡する者が続出したり、といった記事が多く記される。同書巻1の弘治4年(1491)の記事には、春3月にオイラートの卓里台吉が侵入し、鎮番の住民200人余りを拉致、ラクダ83頭・ウシ4頭を掠奪したと記した後、彼らがたどった運命について、『雲夢堂漫記』なる随筆を引き、「拉致された鎮番の人々は、男女ともに奴婢にされ、容貌の美しい女性であればただちに妾とされる。男であれ女であれ、少しでも仕事が怠慢であれば、両手を縛って馬の後ろにつなぎ、馬を狂奔させて走り回り、死ぬまで引きずり回して鬱憤を晴らす」と述べる。一方で明の側も、捕虜にした牧民たちを塩田での労役に充てて「塩奴子」と呼んだというから(同書巻1、建文3年(1401)の記事)、どちらの扱いも似たり寄ったりだったのだろう。実際、漢人側の兵卒の中にも、国境を越えて脱出し、牧民たちのもとに逃げ込む者は後を絶たなかった。

16世紀に、アルタン(俺答)がフフホト周辺などに、このようにして彼のもとに集まってきた漢人たちのコロニー(板升)を作り、農工業に従事させたことはよく知られている。エチナに居住していた漢族たちも、現地で農耕、あるいは製塩業に勤しんだり、職人ならば鍛冶などの手工業に勤しんだりして(製鉄も、塩湖での製塩とともに、鎮番衛をはじめとする西北の城市の主要産業であった)、おそらくは牧民勢力の支配のもとに暮らしていたものと思われる。おそらく統計的な数値には表れずとも、エチナにはそれなりにまとまった人数の各族が雑居し、決して無人の荒野に成り果ててはいなかったのではなかろうか。

もう1点気にかかるのは、なぜこの正徳8年(1513)という時点で、この暴動が発生したのか、という点である。それは、この翌年の正徳9年(1514)に、エチナの西のハミ王家が、

名実共に消滅してしまうからである（この点は、甲南大学の堀直氏よりご指摘頂いた）。この頃ハミでは、陝巴の子のバヤジド（拜牙即）が王位を継承していたが、トゥルファンのスルターンのマンスール（満速児、アリー（阿力）の子、アフマド（阿黒麻）の長子）に屈服し、ハミを棄ててトゥルファンに去った。この政変とエチナでの暴動に、果たして何か関連性はあるのだろうか？あるいは、気候の変化に伴うエチナの居住環境の悪化も、何か関係しているのだろうか？史料からは、これ以上何も分からない。

そしてこれを最後に、これまで時折おぼろげながらも見えていたエチナに関する記述は、史料上からは完全に姿を消してしまい、以後、清の時代にはいるまで、当地の消息はほぼ全く分からなくなってしまう。この事態は、明の対外消極策の進展と軌を一にしており、16世紀以降、エチナの存在は、もはや明朝中央政府の目の届かない、視界のかなたに消え失せてしまった。このことは、そちらに目を向ける意志も必要も、おそらく感じなくなっていたためでもあろう。16世紀に製作された絵地図からも、そのことがうかがえるように思える。次にそれらを紹介していこう。

第2節 16世紀の絵地図から

【長城線の大改修】

土木の変以降、明は塞外からの侵攻を水際で叩くよう方針を転換し、防衛力強化のために、東は朝鮮半島北部の鴨緑江岸から、西は甘肅西部の嘉峪関に至る、およそ6,300kmにわたって、長城（辺牆とも呼ぶ）の建設・整備を加速させた。そして成化10年（1474）、余子俊の発案により、これまで砦や烽火台といった、いわば点と点をつないだ防衛線を構築し、土塼を補助的に組み合わせる、という従来の建設・整備方針をあらため、高さ7mにも達する長大な一線の壁、それも版築で固めた土塼ではなく、表面をレンガ（磚）でおおった強固なものを構築して、こちらを防御の主役とし、砦や烽火台を補助的に配置する、という大転換が実施された。この方式は、まず榆林から寧夏にかけてオルドスを横断する長城から着手され、順次ほかの地域にも適用されてゆき、およそ100年余りをかけ、膨大な資金・物資・人員を投じ、中国の北辺全域を囲い込む強固な城壁が完成した³⁰。

この強固な防壁も、16世紀に全モンゴルの統一に成功したアルタン（俺答）率いる軍勢によってしばしば突破され、嘉靖29年（1550）には北京を包囲されるという事件すら起こり、

³⁰ 阪倉篤秀『長城の中国史—中華 vs. 遊牧六千キロの攻防—』（講談社選書メチエ 289、2004年）第4部を参照。

その実効性にはかなり疑問が残るのだが、隆慶5年(1571)に明とアルタンとの間で和議が成立した後(隆慶和議)、外から力でこの防衛線を打ち破ろうとする大規模な動きは、しばしの間終息する。いわゆる「北虜南倭」と称される外部からの攻勢に曝されていた明側にとって、長城の持つ意味は、その実効性よりも、むしろ強固な壁に囲まれている安心感・満足感、という心理的な部分の方が大きかったのかもしれない。かくして、明が名実共にエチナを放棄したのは、長城線が最終的に完成したこの頃、ということが言えよう。

【九辺図に描かれたエチナの姿】

長城線は、各地の軍事拠点を中核として、9つの管轄区域が設定され、「九辺鎮」と総称され、嘉靖年間には、この九辺鎮の全体像を、文字情報と絵地図によって記録した書物が多数登場する。便宜上、これらの書物に掲載された絵地図および写本の類を、『九辺図』と総称する。

一連の『九辺図』のうち最初に登場したのは、許論が嘉靖13年(1534)に原図を作成した『九辺図論』である。この書物の登場以降、現存するものだけでも、嘉靖20年(1541)時点での情報を載せた魏煥の『皇明九辺考』、同じく嘉靖年間に出された張雨の『辺政考』、隆慶3年(1569)に兵部によって編纂され、霍冀によって上呈された『九辺図説』などが、次々と刊行された。このほか、記録のみあって現存していないものを含めれば、さらに多数にのぼると思われ、掲載された情報や図版は、さらに同時代の類書(一種の百科事典、同時代に流通する書物に収められた文章・イラストをダイジェストで編集)や兵書(軍事に関するあらゆる情報を網羅した、これも一種の百科事典)にも転載され、版本の形で幅広く普及した。

これらはいずれも、同一の原版を踏襲して流用しつつ、出版された時点での最新情報を適宜盛り込んでいく、という形で順次出されたもので、いずれもおおむね似たような描き方がなされている。エチナの部分に着目すると、「エチナ城」(駟昇万城・亦集乃城など、さまざま表記あり)の周囲は3つないしは4つの湖があり、それらが水路によってつながれているような姿で描かれている。図版5は、張雨『辺政考』および魏煥『皇明九辺考』に収められた絵地図の、部分拡大図である。

また、『九辺図』には、1枚ものの彩色写本3点の存在が知られている。遼寧省博物館と中国歴史博物館にそれぞれ所蔵されている『九辺図』写本(どちらも嘉靖年間に成立)は、いずれも同一の表現に基づいて描かれており、許論による識語が記されているところも共通する(遼寧省博物館の写本には満洲文字による注記あり)。これらを見ると、いずれも「エチナ城」を取り囲む水路でつながった湖を描くところは、先に挙げた各種版本と同じだが、この2点の写本はさらに、城郭の中にも湖があり、黒河がそこに向かって流れ込む姿を描いてい

る点が特徴である。また、中国歴史博物館の所蔵する、万暦 30 年 (1602) に兵部職方郎中の申用懋が作成した『申用懋繪九辺図』写本は、大同以西の部分、全体の約 3 分の 1 が残存し、嘉靖以降の新情報が追加されている。エチナ城の周囲には、3 つに分岐した黒河の流れが挟み込むようにしてせまり、その先に 1 つずつ、合計 3 つの湖が位置している³¹。この表現は、図版 6 にて示した、万暦年間に出版された類書、『図書編』巻 43 所収の「九辺形勝」と同じ表現である。

これら『九辺図』には、おそらく皇帝の御覧に供するための 1 つないしは複数の原図がまず作成され、それらをもとに、各種のバージョンが派生していったもの、と考えられる。

これらの図を一見して気がつくことは、エチナとその周囲の湖が、きわめて模式的・抽象的に表現されている、という点である。おそらくこれは、さきに第 1 章第 2 節で紹介した「かつての居延沢が、3 つの小さな湖に分かれてしまっている」という情報、及び、その文章に続けて、この地が「さまざまな川の流れが最終的に集まってくる」と記されていること (梁份『秦辺紀略』巻 3「甘州北辺近疆」居延沢)、この 2 つのイメージを図化して描いたために他ならない。この時の地図作製者の手許には、現地の実情に基づいた最新情報は、おそらく無かったのであろう。

【陝西輿図に描かれたエチナの姿】

16 世紀にエチナを描いた地図としては、当時の陝西全域 (明代当時の行政区分、現在の陝西・甘粛両省の範囲を含む) を、南を上、北を下にして描いたものが存在する。そこから派生した河西回廊の部分拡大図とともに、それらを一括して『陝西輿図』と総称する。この系統の地図が、いつ頃登場したのかは定かではないが、現在まで伝えられているのは、いずれも『九辺図』が登場した嘉靖年間以降に作成されたものである。

現在見ることができる最も古いものは、図版 7 に示した、嘉靖 21 年 (1542) 成立の『嘉靖陝西通志』(馬理等纂修、全 40 巻) 巻 6 所収の「全陝疆域図」、及びその部分拡大図である「河西疆域総図」である。このうち「河西疆域総図」には「エチナ城」(亦集城) が描かれ、その周囲を分岐した黒河の流れが取り巻き、3 つの湖を連結している。これは、さきの『九

³¹ 以上順に、『中国古代地図集・明代』(文物出版社、1994 年) 所収の図版 16・17・24・49-51、および解説を参照。遼寧省博物館所蔵『九辺図』写本の「亦集乃城」を囲む城郭には、歴史上の古城 (すでに廃墟となっているところ) を示す記号が使われており、これは他のいくつかの『九辺図』系統の表現と共通する。城郭の中央に湖を抱くカラ=ホトの姿は、大変にユニークである。古代の遮虜障で囲まれた居延沢に由来するイメージなのだろうか？ それとも、カラ=ホトを中華風の城郭都市ではなく、あえて「オールド城」のイメージで表現したもの、と考えることはできないだろうか？

辺図』と同じ表現である。一方、黒河の上・中流域の水系の描き方は、かなり精確である。この図もやはり『図書編』巻 47 に転用され、「河西疆域総図」として掲載されている。図版 8 として示したこの図を見ると、もはや「エチナ城」(亦集城)は、大きな湖水の真ん中に浮かぶ島のように描かれている。一方、これはかなり微妙なところなのだが、黒河が、居延沢とおぼしい湖に流入するところに、中州のような、三角州のような島が描かれている。これはもしかすると、かつての地図(図版 1)の表現が変形されて伝わった可能性も無くはない。

そしてもう 1 点は、北京図書館の所蔵する『陝西輿図』写本である。これは天啓年間(1621-1627)に作成された彩色地図で、図の収録範囲は、さきの『嘉靖陝西通志』巻 6「全陝疆域図」とほぼ同じで、現在の陝西・寧夏・甘肅・青海各省が含まれる。やはり南が上で北が下にくるレイアウトで、おそらく共通する祖本があったと考えられる。こちらは 2 つの河川が大きな無名の湖水に流入する姿を描くが、エチナの地名表記はなく、中州のような箇所を示されているのは、肅州の最前線の「金塔寺堡」(現在の金塔県)である。あるいはこれもかつての地図(図版 1)をなにがしか踏まえているのかもしれない。印象的なのは、明の押さえている長城線の内側が中華のシンボルカラーである黄色に、その外側が緑色に、それぞれ彩色されている点である。エチナとおぼしい箇所の周囲には、牧民のゲルやチベット風の寺院が描かれ、この一帯が中華世界ではないことが視覚的に示されている³²。

また、地図中の城郭の形態は、『嘉靖陝西通志』巻 6 以下に収められる、行政区別の城郭図とその多くが一致し、これもさきの『九辺図』と同じく、もととなる原図が存在し、そこに収められたデータを分載したのが『嘉靖陝西通志』の各主題図、最新のデータを盛り込んで改訂したのが、北京図書館所蔵の『陝西輿図』写本、という関係になるのであろう。

結局、16 世紀の絵地図には、エチナの現状に基づいたデータが、ほとんど盛り込まれていない、ということが見て取れる。『九辺図』などは、国防のための主題図であるから仕方がないのだが、これらの地図に盛り込まれた制作者、そして利用者たちの視線は、限りなく「内向き」だったと言わざるを得ないだろう。ここには、『混一疆理歴代国都之図』に見

³² 『中国古代地図集・明代』所収の図版 85-90、および解説を参照。なお、万暦後期(17 世紀初頭)に成立した、中国第一歴史档案馆所蔵『両河地理図』でも、亦集乃には地名表記がなく、中央に島を浮かべた湖水が描かれる。その向こうには、馬やラクダに乗った牧民の姿やゲルが描かれ、この地域が牧民の世界であることを示す。同書図版 56 および解説参照。

ような伸びやかさは、どこにも見られない。明の、とりわけ宮廷を中心に集う人々は、外部からの侵攻を過敏なまでに気にしつつ、彼らは長城線の内側に自らを閉ざし、外への視線をも自ら遮断してしまったのであろう。そしてその中で、エチナのことも見えなくなり、忘れられていったのである。

おわりに

以上、エチナをめぐる明代の情勢をまとめると、以下のようなになるだろう。

明朝は、その前期に当たる 15 世紀前半頃まで、元の時代の状況を継続的に利用しつつ、軍事的圧力と朝貢体制による恩恵とを使い分け、積極的な外交政策を展開、エチナに対しても間接的に支配力を及ぼし続けていた。しかし、漠北の遊牧勢力の台頭と、それに伴う侵攻の激化により、土木の変を境に外交方針を積極姿勢から消極姿勢に転換、その結果、明側が影響力を及ぼしうる範囲は後退し、それとともにエチナも放棄された。16 世紀には、明は国境の長城線を強固に整備して専守防衛に努め、もはやその外側に向かって手を伸ばす意志も実力も失っていき、それに伴いエチナの現状も全く分からなくなってしまった。

明がエチナを放棄し、黒河中流域まで国境線を後退させた原因は、以上のように政治的要因が強いのだが、それでは、エチナの水が大幅に減少したと考えられる、14～15 世紀にかけての自然環境の変化は、このことにどこまで関係しているのだろうか？近年の研究結果では、14～15 世紀にかけて気候の寒冷化が進行し、乾燥化に伴い黒河の水量が減少していった、というシナリオが想定されている。たとえば、宋晟の建議が採用されなかった、あるいは実行に移すことが出来なかった要因として、下流域の乾燥化と黒河の水量の減少、それに伴う現地生活の困難、という要因も、やはり無視できないのではないだろうか？

こうしたことを、文献の上から確認していくことは、かなりの困難が伴うと思われる。今後は、エチナの上流、黒河の中流域に位置し、比較的まとまった量の文献が継続的に残されている、張掖や酒泉の地域に関して、水と人との関わりをめぐる歴史を探り、下流域の歴史展開と対比・関連させつつ見ていくことが必要と考える。現在筆者は、張掖・酒泉地区における人口・農地面積・収穫量・灌漑水路の整備状況などのデータを整理し、とりわけ明代以降における当該地域の開発の歴史に焦点を当てつつ考察を進めている³³。あるいは

³³ その一部は、「人口・農地・灌漑データから見た黒河中流域の開発の歴史」と題して、口頭で発表（第 25 回オアシス研究会、2005 年 11 月）。

は、今現在と同じく、黒河中流域における一連の開発に伴う人為的な環境変化が、下流のエチナに影響を及ぼす、というシナリオが浮かび上がる可能性もあるかもしれない。

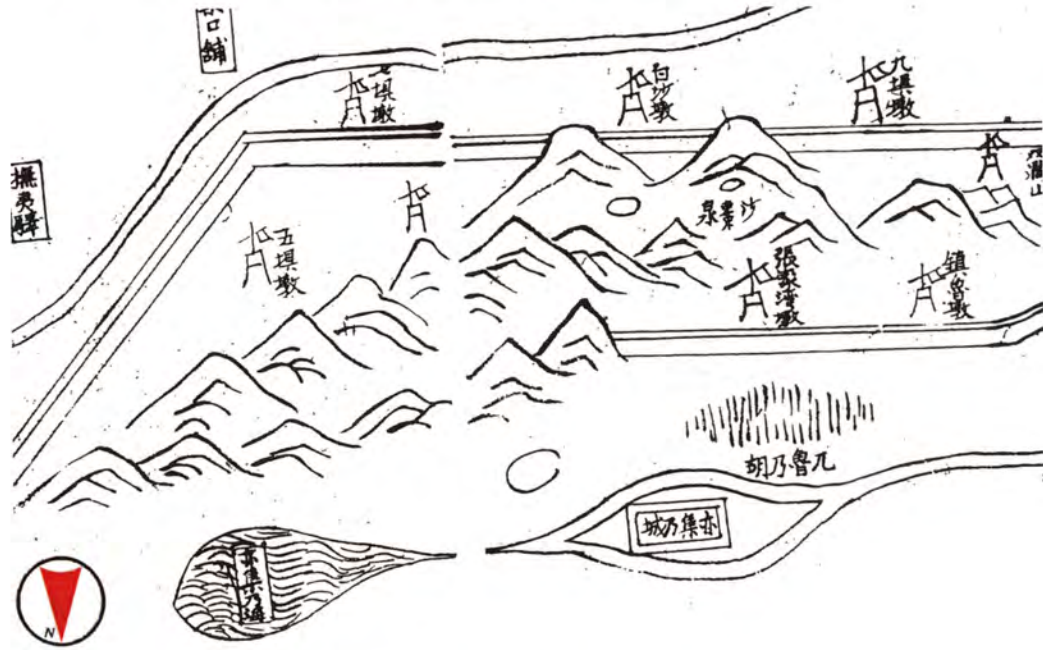
なお最後に、筆者の能力の関係から、今回使用した史料はすべて漢文史料であり、あくまで中国側からの目線にたったエチナ簡史となってしまったことを、お断り申し上げておきたい。また、モンゴルあるいはイスラームに由来する人名などについては、なるべくカタカナ表記を心がけたつもりだが、もとより不正確きわまりないものであり、なにとぞご教示を請いたい。今後は、今回採り上げた個々の論点について、より考察を深めていくと同時に、同時代の他の言語で記された史料なども活用し、幅広い視点から、より多くの事実を明らかにしていきたいと考える次第である。

《附記》

2004年8月のチベット・ラサにおけるポスター発表、ならびに、今回のこの報告において図版4として使用させて頂いた『混一疆理歴代国都之図』（本光寺図）に関して、筆者に対し、本図の調査・掲載にあたって多大なるご高配を賜った本光寺住職の片山秀賢氏、かかる機会を与えて下さった京都大学文学研究科の杉山正明氏、そのほか関係する多くの方々に、末筆ながら、この場を借りてお礼申し上げます。

また、図版2の衛星写真をご提供下さった奈良女子大学の相馬秀廣氏、図版3の掲載をご許可下さった京都大学文学研究科、そのほか、筆者に対し有益な助言を賜った多くの方々にも感謝いたします。

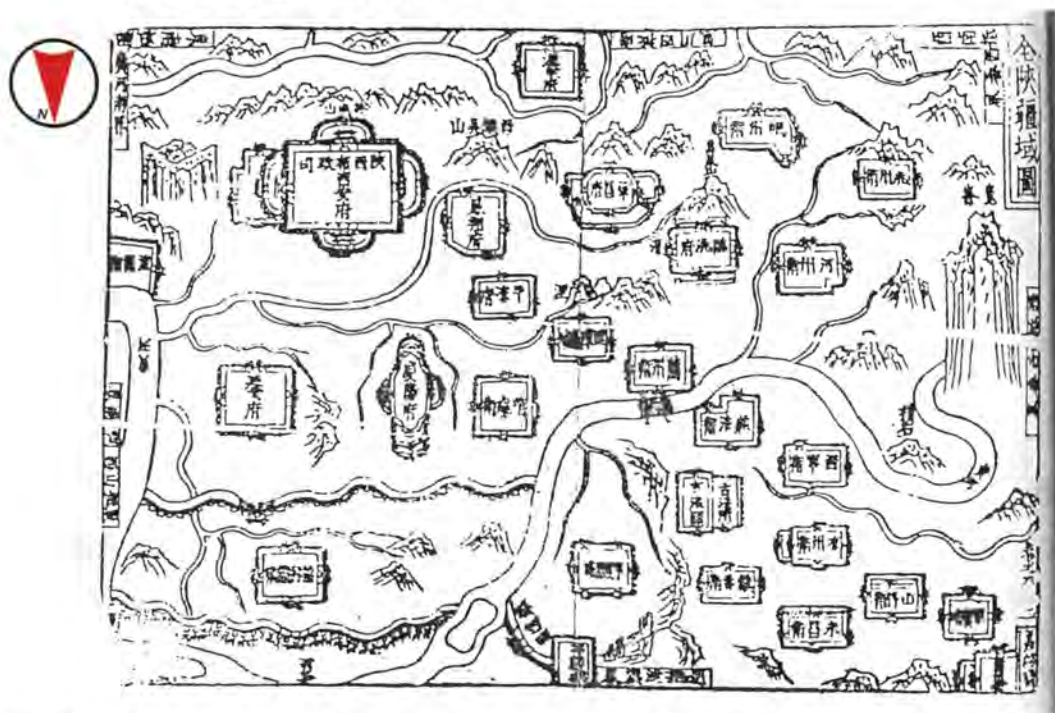
図版 1 『肅鎮志』巻頭の絵地図（部分）。『中国方志叢書』華北地方・甘肅省（台北・成文出版社、1970年刊）所収の、景印清鈔本より。



図版 2 現在のカラ=ホトとそれを取り巻く旧河道の衛星写真。'KH'はカラ=ホト、'AT'は大同城、赤い矢印は人工的に河道を改修した箇所を示す（相馬秀廣氏による）。



図版7 『嘉靖陝西通志』所収「全陝疆域図」。『中国西北稀見方志統集』1（『中国公共図書館古籍文献珍本匯刊・史部』、中華全国図書館文献縮微複製中心、1997年）所収の、景印明嘉靖21年（1542）刻本より。



図版8 『図書編』所収「河西疆域総図」（部分）。景印明万曆41年（1613）刻本（台北成文出版社、1971年刊）より。最下方に描かれた3つの湖水の名称は、左から順に「硝池」・「青塩池」・「紅塩池」。

